（別紙５－１）

平成30年度 学 生 海 外 研 修 報 告 書（担当教員）

鹿児島大学長　殿

授業担当者

所属/職名：法文学部　准教授

氏　　名：酒井 佑輔

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	アマゾナス連邦大学　他（ブラジル連邦共和国　サンパウロ州、アマゾナス州）
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日

〔研修の成果〕

研修成果は大きく分けて5つある。1つ目は、一昨年同様、日本では学ぶ機会が多くない日系移民の歴史について理解を深められた点である。事前研修では、研修生全員ではなかったが日系移民の歴史に関する映画を鑑賞するなどして理解を深める機会をもうけた。研修先では、鹿児島県人会の方々との交流や移民資料館や東山農場、JICAサンパウロ事務所、マナウス総領事館等の訪問を通じて、日本人移民の歴史や彼ら・彼女らのプレゼンスに関する理解を深めることができた。

２つ目は、アマゾンにおける国立公園策定の現状やその矛盾について理解を深められた点である。研修で訪問したアナヴィリャーナス（Anavilhanas）国立公園（ユネスコの世界自然遺産「中央アマゾン保全地域群」やラムサール条約に指定）では、公園内を探索し、アマゾンの自然環境やそれが近年回復してきている現状、また国立公園に策定されたことによりその土地で従来の生業を営むことができなくなった人々の集落を訪問した。国立公園を管理するICMBIO（INSTITUTO CHICO MENDES BIODIVERSIDADE）（シコメンデス生物多様性院）の事務所では、一昨年同様にアマゾンの環境保全を考えるうえで重要な野生動物や、ネグロ川に生息するピンクイルカの特徴やそれと触れ合う機会、生物多様性保護を促進するための環境教育の取り組み、国立公園の策定前から地域に住んでいた人々との軋轢等について学習することができた。以上の学習を通じて、学生たちはブラジルアマゾンの生物多様性や国立公園策定が抱える矛盾について深く学び考えることができた。

３つ目は、本学とアマゾナス連邦大学の関係者らがいつでも情報共有を行えるフェイスブックページを立ち上げたことである。事前研修中に本学学生とホームスティ先の学生らが交流をはかれるよう、フェイスブックでグループページを作成した。このページを通じて、両大学の学生並びに教職員が研修後も継続した情報交換を行えるようにした。

４つ目は、日本に興味関心を持つブラジル人学生や教員に対して鹿児島（特に島嶼地域）について広く広報できたことである。9月10日にアマゾナス連邦大学文学部日本語学科主催のXICICLO DE PALESTRAS Lingua, Literatura, e Cultura Japonesa」（第11回日本語、文学、文化講演会）に参加し、学生たちは、事前におこなった徳之島調査の結果の一部に言及することができ、島嶼部の魅力や地域活性化について言及することができた。こうした取り組みを通じて、ブラジル国内（特にアマゾン）においてあまり認知されていなかった鹿児島を広く宣伝し、さらに多くのブラジル人観光客が来鹿するための提案を検討することができた。

５つ目は、徳之島で栽培されているキャッサバ（中南米原産）や、コーヒー（ブラジルが世界最大の生産量）等を活用した島嶼部の地域活性化を考えるための調査を実施できた点である。具体的にはキャッサバ栽培並びに加工方法に関してアナヴィリャーナス国立公園の集落で実際にみることができ、またキャッサバを活用した食べ物等も広く学ぶことができた。東山農場ではコーヒー栽培の歴史やその方法について学ぶことができた。研修を通じて得られた調査・学習成果は、P-SEGによる報告会ならびに12月上旬に予定している徳之島での報告会を通じて、学生や地域の方々へ広く還元予定である。

（別紙５－1）

平成30年度　学 生 海 外 研 修 報 告 書（担当教員）

鹿児島大学長　殿

授業担当者

所属/職名：法文学部　准教授

氏　　名：酒井 佑輔

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先（国・地域） 滞在地	アマゾナス連邦大学　他（ブラジル連邦共和国　サンパウロ州、アマゾナス州）
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日

〔今後の課題〕

・海外研修を通じて協定大学に留学を希望する学生への制度的なフォロー：
一昨年同様に、研修事業を通じて本学ならびにアマゾナス連邦大学の学生による留学に対する希望や関心は高まっている。彼ら・彼女らの留学を実現させるためにも、送り側・受け入れ側の環境整備（補助金獲得や留学手続きの簡素化、留学までの期間の短縮、学生への広報強化、トビタテJAPANの地域枠の拡大等）が重要だと考えられる。特に、留学の募集が年に1回だけなのと、かつその募集期間が海外研修が集中的に実施される9月の前の8月というのは、海外研修を経て留学と言う過程を重視するならば問題ではないだろうか。せめて年に2回実施する、もしくは募集期間を8月ではなく10月等にするといった対応が重要だと考えられる。

・本研修を通じて実施できた調査結果や学習成果を徳之島へ丁寧に還元するためにも、事後学習には力を入れていく必要がある。